

宮崎県大淀川水系萩原川で採集されたオヤニラミ属

○望月健太郎・羽多宏彰・藤田衛・細谷和海(近大農)

【背景・目的】

オヤニラミ属 *Coreoperca* はケツギョ科に属する肉食性の純淡水魚である。本属は東アジアを中心に世界で 4 種(オヤニラミ *C. kawamebari*, コウライオヤニラミ *C. herzi*, チュウゴクオヤニラミ *C. whiteheadi*, *C. liui*) が知られる。国内においてはオヤニラミが分布しているが、環境省レッドリストでは絶滅危惧種 IB 類に指定されている。一方、観賞魚としての人気が高く、飼育魚の投棄や愛好家による意図的な放流によって、国内外来種として各地に定着している(藤田, 2015)。

2017 年宮崎県内水面漁業協同組合連合会の調査により大淀川水系萩原川でコウライオヤニラミが確認された。さらに 2018 年, コウライオヤニラミが同河川で捕獲されたという情報がインターネット上に掲載された。しかし, これらの情報には本種であるという同定の根拠は示されておらず, 本属にコウライオヤニラミであるかどうか不明なままである。本種のように温帯域原産の淡水魚は, 国内における定着が容易で, 全国各地に拡散する危険性がある。また, 本種は肉食性が強く, 最大 30cm まで成長するため(内田, 1935), 在来の水生生物, 特に本種と同属のオヤニラミに対して甚大な被害が予想される。そのため, 実際に現地へ向かい, 得られた個体について詳細な精査を行い, 生物の基礎となる種名を確定させることは今後の対策に有益な情報となる。そこで私は宮崎県萩原川へ向かい, 採集した個体について同定を行った。これに合わせ, 本河川における生息状況を報告する。

【材料と方法】

2018 年 11 月 19 日に宮崎県都城市萩原川で採集したオヤニラミ属 17 個体を供試魚として用いた。計測および計数は Hubbs and Lagler(2004)に従い, 9 項目の計測を行った。また調査地点の環境については細谷ほか(2016)に従って記録した。

【結果・考察】

供試魚として用いた 17 個体中 14 個体の体高/体長が 35.8–38.8%, 眼径/体長が 9.7–10% であり, 計数形質では側線鱗数が 52–56, 側線下方横列鱗数が 27–31, 背鰭条数が XII–XIII, 12–14, 臀鰭条数が III–IV, 8–9 であった。これらの形質から内田(1935)と比較した結果, この 14 個体をコウライオヤニラミと同定した。また, 残りの 3 個体は体高/体長が 28.1–32%, 眼径/体長が 7.1–9.7% であり, 計数形質では側線鱗数が 33–35, 側線下方横列鱗数が 16, 背鰭条数が XI–XII, 11, 臀鰭条数が III, 8 であった。これらの形質から木村ほか(1994)と比較して, この 3 個体をオヤニラミと同定した。よって, 本河川ではコウライオヤニラミに加え, これまで宮崎県で確認されていなかったオヤニラミの生息も明らかとなった。

オヤニラミ属は観賞魚として人気が高い。そのため, 本河川に生息するコウライオヤニラミとオヤニラミの由来については, 観賞魚ブームの影響が背景にあるものと推測される。今後はこれらの由来を探るとともに, 本河川におけるこれら 2 種の継続的なモニタリング調査, および他地域へ分散させない対策を考える必要がある。